

# 雲岡曇曜五窟前期の壁面造営について

## Processes of the wall construction in the early period of the Five Caves of Tan Yao in Yungang Grottes

車 星璇  
CHE XINGXUAN

### 1. 緒論

#### (1) 研究背景と目的

雲岡石窟は、中国山西省大同市の西に位置する北魏時代の石窟である。開鑿時期によって、雲岡石窟は三期に分けられる。その中で、第一期は「曇曜五窟」と呼ばれ、現在第16、17、18、19、20窟と番号される(460年～465年)。窟ごとに、一体の本尊の大仏を彫り出した。この五窟の中で、第19窟は、左右に小型の脇窟である第19-1窟と第19-2窟を備えている。第19窟の脇窟を含め、各窟内の本尊は、窟の北壁に彫られた。外壁が崩落した第20窟を除き、各窟東西壁、特に南壁は、様々な龕と造像で埋められ、それぞれの窟によって、壁面に穿たれた龕の配置や、像の種類が異なり、石窟の造営過程、穿たれた龕の前後関係また造営に参加した工人たちグループや、彼らの石窟造営に関する認識及び経験などを反映している。石窟全体の理解に不可欠な要素であるため、詳しく研究する必要があると考えられる。

本研究は、曇曜五窟の開始段階の様相を示している前期石窟を注目し、曇曜五窟の最初期の石窟の壁面造営過程とその特徴を明らかにしたいと考えられる。

#### (2) 先行研究

これまでの先行研究では、壁面に造営された龕あるいは造像の造営時期、あるいは石窟全体の開鑿過程に注目してきた。その中で注目されるのは、近年の彭明浩氏の研究である。彭氏は、曇曜五窟では、明窓の開鑿から始まり、徐々に石窟の底面を下げていったことを明らかにした。そして、この過程で、窟内部の千仏や龕などの造営も同時に行われていたことについても指摘している。本研究の壁面造営過程に関する内容は、彭氏の研究に基づいて行った。

#### (3) 研究方法

本研究では、曇曜五窟の前期石窟の壁面に彫り出された千仏龕や寄進龕を対象とし、それらの位置関係やそれらの間に存在する切り合い関係とを観察することで、壁面がどのように造営されたかを分析したいと考えられる。

### 2. 第19窟の壁面造営

#### (1) 第19窟全体的な壁面造営過程

第19窟各壁面の具体的な造営過程は、まずは明窓から石窟の内部空間を彫り出し、石窟の底面を図1で示した線①まで下げていた時に、線①以上の壁面造営がすでに完成され、続いて石窟の底面を線②まで下げていた時、中層の壁面造営もすでに石窟の開鑿に伴って完成された。そしてここで、石窟の開鑿時期の千仏龕の造営が停止した。その後、地面まで石窟の底面を下げていったが、その壁面の千仏龕は開鑿時期より遅い時期にされたものであるため、開鑿時期に門口だけを開くだけで、しばらくの間放置されたと考えられる。

東西及び南壁の各壁面の主な造営対象、すなわち千仏龕は、それぞれ壁面ごとに別々に造営されたと考えられる。またほとんど全て風化した東壁を除くと、残りの壁面にある千仏龕は、多くの異なるグループの工人たちによって分担され開かれた。

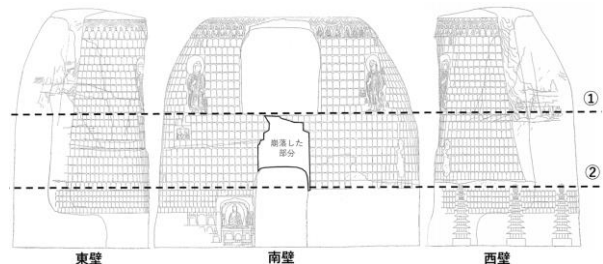


図1 第19窟の東西及び南壁の造営過程

#### (2) 第19窟の壁面造営の特徴

窟内東西隅の二体の立仏を彫り出すために、南壁の立仏に近いところの一部分の壁面が凹んでいる。凹んでいない部分の壁面に掘り出された千仏龕の中の、少なくとも半分ぐらいは、凹んでいる部分の壁面に掘り出された千仏龕と形式が違っている。このことは、南壁のこの二つの部分の千仏龕造営活動の間には、時間的な差が存在する可能性を示している。また、南壁上層のほとんどの千仏龕の造営は、東西隅の立仏より早かったことが知られる。

### 3. 第19窟の脇窟の壁面造営

#### (1) 第19-1窟の全体的な壁面造営過程

第19-1窟の壁面を見ると、図2で示したように、赤い点線の高さの付近で、一旦造営が停止したこと

がある。そして再び底面を地面まで下げていき、線以下の壁面造営も完成した。また、各壁面の坐仏列像は、それぞれ様式的な違いが存在するため、壁面によって別々に、違うグループの工人たちによって造営されたと考えられる。

## (2) 第19-1窟の壁面造営の特徴

第19-1窟の東西脇侍菩薩に沿った部分に彫り出された坐仏は、同壁のほかの部分の坐仏列像とは、異なるグループの工人たちによって彫り出されるという状況が存在する。その部分に彫り出された坐仏列像は、脇侍菩薩が彫り出される後に造営され、ほかの部分の坐仏列像は、その前にすでに造営されたものだと考えられる。この状況も、坐仏列像の造営は、東西脇侍菩薩より早かったことが知られる。

第19-1窟の南壁明窓の両側に掘り出された龕と坐仏列像は、左右対称に配列されていない。その中の龕1と龕2、そして龕3と龕8は、形式がそれぞれ類似し、また龕2と龕3は寄進龕である。この状況が、当時の工人たちが、全体的な壁面造営の設計に対して未だ経験不足で、壁面を左右対称に設計することを重視していなかったことを示している(図2)。

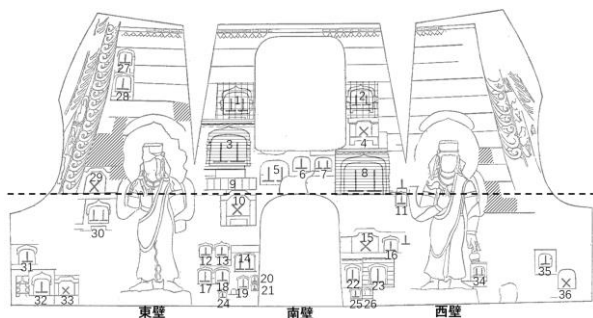


図2 第19-1窟の東西及び南壁の造営過程

## 4. 第18窟の壁面造営

### (1) 第18窟の全体的な壁面造営過程

図3で示したように、第19窟と第19-1窟のように、第18窟の壁面造営も、石窟の底面が線①と②までそれぞれ一時停止した時に完成されたと思われる。

天井に近いところに彫り出された数列の坐仏列像は、様式的な違いが存在するため、壁面によって、違うグループの工人たちによって造営されたもの

と考えられる。また、各壁の最も下に位置する一列の坐仏列像は、上の坐仏列像より小さく彫り出され、あるいは、途中まで造営が停止した。これは坐仏列像の下にある龕が、各壁の最も下の坐仏列像より早く彫り出されたためだと考えられる。この状況は、坐仏列像の下の龕の造営の重要性が、坐仏列像より高いことを反映していると考えられる。

### (2) 第18窟の壁面造営の特徴

坐仏列像の下にあるそれらの龕、特に東西壁の上層の合計六つの寄進龕は、同じ高さに、左右対称に配列される。それら寄進龕の配列からは、第19-1窟より秩序だち、寄進龕に対して第19-1窟より重視されたことが理解できる。また、寄進龕が最初から壁面造営の計画の中に含まれるようになったことを意味すると思われる(図3)。

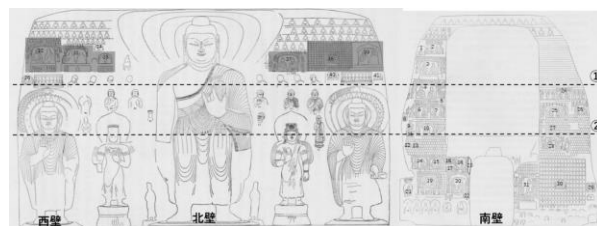


図3 第18窟の壁面造営過程

南壁の明窓及び門口の東側部分の壁面にある龕は、東壁の間に空白が存在する。その空白は、東壁立仏の腕の部分に彫り出された後に出た痕跡で、龕がその空白を避けて掘り出されたのは、立仏が彫り出された前にすでに造営されていたことを反映していると考えられる。

## 5. 結論

曇曜五窟の前期石窟を概観すると、それらの窟の壁面は、底面を下げる工事に伴って行われ、東西壁及び南壁の造営は、壁面によって別々に行われたことが明らかとなった。また窟内では、千仏龕や坐仏列が掘り出される場合、それは大型像より先に掘り出されたが、寄進龕は、それらよりも早く穿たれることもあった。第19窟から第18窟まで、設計が徐々に複雑になっていく様子が理解され、それに伴い、工人たちの経験が増加し、寄進龕が最初から造営計画の中に含まれるようになったことが明らかとなった。

**Abstract:** This study takes the early period of the first phase of the Yungang Grottoes (Five Caves of Tan Yao) as a research project, focusing on the style of niche and statue carved into the wall of the grottoes, the form and arrangement of the niche, to clarify the process and characteristics of the construction of the walls in the each cave of the early period of Five Caves of Tan Yao, and the relationship between the groups of workers involved in the construction of each cave. In addition, the construction and design of the walls in the early period caves gradually became more complex as the workers gained experience, and the meaning of whole objects constructed on the wall also changed.